シンクタンクの役割を果たす

JTB旅行スタンプ みやげみらい委員会

JTB旅行スタンプ加盟店連盟は07年、若手会員ら17人による組織「みやげみらい委員会」を立ち上げ、みやげ業界の発展に向けて連盟の新しい事業領域を研究してきた。約2年間の議論の成果は最終答申として、先の連盟第41回通常総会で発表された。今回、委員会の中心メンバーにお集まりいただき、議論と答申の中身を含め、今後の業界と連盟のあるべき姿を語ってもらった。

河合氏

――**(司会)** みやげみらい委員会が総会の最終答申で2年にわたる活動を終えた。現在の心境をうかがいたい。

河合 交流文化と電子商取引をテーマに2年間、議論を続けてきたわけだが、議論を重ねれば重ねるほど、課題が増えていった、という感じだ。今回、総会で最終答申をさせていただいたのだが、なかなか具体的な形にすることができず、本音は「これでいいのかな」というところだ。

ただ、ある程度の方向性は出せたと思う。今度は連盟の中に立ち上がる新たな委員会で、具体的な形の見える提案ができるように、一歩先へ踏み込んでいきたい。

阿野 悩み続けた2年間、というのが率直な感想だ。だが、そうやって皆で悩むことが大きな一歩になったのかな、という気がする。

今、委員長が言われたように、具体的な形は残せなかったが、次に創設される政策集団に活動を引き継げることはよかったと思う。

この、みやげみらい委員会を核として、各地域に同じような政策集団ができつつある。そのような動きが出たことも委員会のひとつの成果だと思う。

藤 私の地元は九州だが、全国の委員の皆さまとかかわりを持つ中で、いろいろな話をお聞きして、自分の中に多くの引き出しを持つことができた。それをうちの店はもちろん、同じ支部や、九州域内の仲間にも話をして、アドバイスといえばおこがましいが、参考にしていただくことができた。これは自分自身の成長にもつながったことは間違いない。

スタートの時点で、交流文化と電子商取引という2つのテーマを設定したわけだが、電子商はある程度、見通しを立てられたが、交流文化についてはなかなか結論が見えなかった。結果的にグレーな感じで終わらせてしまったことが少し心残りだ。

小野寺 委員長の人柄で、我々、若いメンバーも自由に

悩むことが大きな一歩
アンテナ張って対応を
避けて通れない電子商

阿野　小野寺　藤

ことを、もっと好きにならなければいけない、と強く思うようになった。お客さまに対して、特産品とか、方言とか、皆が知っているようで知らないことを少し掘り下げて話をすると、すごく喜んでいただける。逆に、お客さまの地元のことも研究すれば、交流文化の輪がもっと広がることになると思う。

原子 委員になるに当たり、連盟の歴史をたどっていかねばと思い、連盟の調査研究委員会が97年に発行した報告書「心にのこるみやげたち」を改めて読み返した。

連盟の運営方針の根幹となっているのはこの報告書で、その理念が調査研究委員会からアクティブ21委員会に引き継がれ、日本おみやげアカデミー賞とみやげ塾が作られた。そして今、みやげみらい委員会が新たな事業を興そうとしている。歴史は受け継がれていくのだ。

2年間の議論では、河合委員長も言われたように、結論は出せなかったかもしれないが、次につなぐことはできたと思う。

馬場 連盟と加盟店の将来像について、非常に時宜を得た話をしていたと感じている。

調査研究委員会の答申を受けて発足したアクティブ21委員会が、日本おみやげアカデミー賞を立ち上げるなど、連盟の基幹的な部分を担っていた。みやげみらい委員会もさらに一歩前進して、連盟を引っ張る羅針盤的な役割を果たしていただきたい。

小野寺氏

調査研究委員会のメンバーの店では、経営が2代目に交代したところもある。そういう新しい世代の人たちがそれぞれの店や業界を担ってきている。その先陣を切って、連盟にこのような委員会ができたことは、誇りを持てることだ。

――委員会では、どんな議論が行われたか。

河合 各分科会の詳細はそれぞれの担当に任せるとして、要は、私たちは2代目、3代目の経営者なのだが、その次の世代に、業界の中でやりがいを見いだしてもらいたい、ということだ。

自分の子どもに、「次はお前がやれよ」と、なかなか言いづらいのだ。その点、交流文化ビジネスは、やりがいを見いだせるテーマのひとつと言える。

業界の未来をしっかり見据えた、未来像ができ上がっていなければ、この厳しい時代に、胸を張って「この仕事はいい仕事だからやりなさい」とは言いづらい。その部分の必要性は強く感じた。

藤 電子商取引チームの討論の中では、先ほど、小野寺幹事が話した通り、状況の変化が著しいのと、地域間で認識の差がかなりあった、ということだ。

ただ、間違いなくこれは避けて通れない問題だ、ということは委員の中で意思統一された。

では、これからどうする、ということで、まず加盟店の中の電子マネー端末の設置状況を調べた。それから、電子マネーを自分たちの商売にどう生かしていくか、ということも考えた。

さらにJTBが設置を推進しているC―REXについて、単に手数料を払う機能を持った機械というだけでなく、稼がせてもらえるハードなのだ、ということに頭を切り換えてもらおうと思った。C―REXを使えばクレジットカードの手数料率が低くなる、ということを知らない加盟店の方が相当いたが、お知らせしたら早速手続きをされて、もう、ほとんどが切り替わったのではないか。

さらに、外国の方々が相当来られている。九州域内には、韓国の方は昨今のウォン安で少なくなったが、中国の方が相当増えている。その方々はデパートをメーンに、銀聯(ぎんれん)カードで買い物をされているし、我々加盟店にも立ち寄りをされる。

ただ、銀聯カードを出されて我々が処理できるか、という問題がある。C―REXの機械自体は処理できるようになっているのだが、扱う人間が対応できるかどうかが疑問なのだ。そのレクチャーも必要だと思う。

インターネットについては、連盟がひとつの事業体になって加盟店の商品を販売する、というのは不可能と討論の中で結論付けたが、販促チャネルのひとつとして、引き続き検討したいと考えている。

地域に愛される施設へ
考えていく過程が大事

河合　中島

阿野氏

発言させていただいて、非常に有意義な会だったというのが率直な感想だ。

電子商取引の分科会で勉強させていただいたが、2年前の会の発足当時と今とでは、世の中の状況がガラリと変わっている。電子マネーに様々な種類が登場し、進化して、利用が非常に増えている。極端な話、昨日と今日とでは様相が全く変わっているという感じだ。

そのような中で、我々がどんな対応をしなければならないか。JTBがどんな方向性を持っているかを踏まえて、アンテナをしっかり張って、きちんと対応しなければならない。

中島 私はこの会が立ち上がった時は、まだ業界に入って日が浅く、右も左も分からない状況だったが、会を通じて全国の加盟店の皆さまと話ができて、すごく勉強になった。

交流文化の話を聞いているうちに、地元の人間が地元のマネーやクレジットカードのメリットをいかに紹介できるか、というところを話し合ってきた。

銀聯については、加盟店の中では、08年度の第1四半期から09年度の第1四半期まで、取り扱いが約千%アップという破格の数字が出ている。これがどうすればもっと増えるか、ということも今後の研究課題となる。

阿野 私たちは交流文化ビジネスを分科会で議論した。07年のみやげ塾で、当時専務だったJTBの田川社長が交流文化をテーマに講演され、これが一番のテーマになるだろうと、取り上げたものだ。

小野寺 この2年間で電子マネーやクレジットカードを使うお客さまが相当増えた。我々は早急に対応しなければならない。ただ、電子マネーについては、地域間でかなり認識の差があるし、地域の特性にあったシステムが必要になると思う。

原子 委員の中でも、「うちは現金商売だからクレジットカードは扱わない」とか、「うちはずっと前からカード対応をしている」など、温度差がかなりあった。

委員会では、そういった温度差を、まず委員の中からなくしていき、連盟全体に電子

JTBの交流文化ビジネスに我々がどうかかわるか、我々のビジネスチャンスにどうつなげるか、に関して、方向性が多種多様で、なかなかひとつの形を出すことはできなかったが、結局は各地域、あるいは各店の問題だ、というところに落としどころが来ない。

ただ、ドライブインなどは、地元のお客さまではなく、遠来のお客さまを観光バスで取り込む、という業態だから、地域に何か貢献しよう、という意識が今まであまりなかったように思う。地域の人々にも、ドライブインはそういう場所だから、「お願いごとはできないな」という、壁のようなものがあった。

ただ、そんなことでは絶対にダメで、やはり、地域に愛される施設でなければいけない。

今、道の駅が支持されているが、我々業界がもっと地域に密着していれば、そのような施設は必要なかったと思う。これは我々業界の反省点だ。

反省して、地域のことをしっかり考えて、地域とともに生きる店づくりを行わねばならない。

中島 この、交流文化というテーマを与えられた時、なかなか答えが出ないだろう、というのがまず考えたことだ。

しかし、例え答えは出なくとも、考えていくことの過程が大事で、それによって皆の意識が上がって、業界がいい方向に向かえば、それでいいのだろうと思う。

私の地元の津和野には、津和野スクリーンプロジェクトという、民間のサークルがある。街の建物の白壁に映像を映し出すのだが、これは、観光客を楽しませるというよりも、むしろ自分たちが楽しむ、というのが始まりだった。

でも、自分たちが楽しんでいれば、まわりからどんどん人が集まってくる。お祭りにしても、にぎわっているところに人が集まるものだ。

そんな活動がどんどん広がるように、持っていければいいと思う。

馬場氏

連盟のシンクタンク　みやげみらい委員会
～みやげ業界の未来について～

オンリーワン運動　日本おみやげアカデミー賞
～心に残るおみやげ創りをめざして～

人材づくり　みやげ塾
～みやげ業は地域文化の伝達産業である～

Your Global Lifestyle Partner JTB

JTB旅行スタンプ加盟店連盟

会長　小野寺邦夫（平泉レストハウス）
副会長（会長代理）四国ブロック（四国支部長）　中野吉貫（琴平ナカノヤ）
副会長　北海道ブロック（北海道支部長）　中村利博（石倉海鮮問屋海商）
副会長　東北ブロック（東北支部長）　佐藤正男（磐梯高原ゴールドハウス目黒）
副会長　関東ブロック（首都圏支部長）　鈴木克彦（金谷ザ・フィッシュ）
副会長　中部ブロック（北陸支部長）　木谷龍司（能登能登金剛センター巌門本店）
副会長　関西ブロック（関西支部長）　沢田和義（大阪城内錦秀）
副会長　中国ブロック（中国支部長）　佐々木雄三（宮島鳥居屋）
副会長　沖縄ブロック（沖縄支部長）　安里清（名護ナゴパイナップルパーク）
副会長　みやげ塾常任講師　大川充彦（福岡市福岡観光会館はかた）
副会長　アカデミー運営委員長（宮崎支部長）　佐藤雅高（高千穂千穂の家）
副会長　みやげみらい委員長　河合徹（美濃関美濃関物産館）
常務理事　新潟支部長　田原直之（小出インター物産館深雪の里）
常務理事　群馬支部長　牧敏弘（水沢うどん茶屋水沢万葉亭）
常務理事　栃木支部長　須藤文夫（中禅寺湖中禅寺観光センター）
常務理事　山梨支部長　山野壮仁（塩山信玄館）
常務理事　静岡支部長　高田守清（奥山きじ亭）
常務理事　東海支部長　日下部彦宏（下呂舞台峠観光センター）
常務理事　長野支部長　新田浩爾（坂城新田醸造）
常務理事　北九州支部長　山口甚一郎（嬉野陶彩野館）
常務理事　長崎支部長　江崎淑夫（長崎江崎べっ甲店）
常務理事　熊本支部長　吉野正孝（瀬の本三愛レストハウス）
常務理事　大分支部長　小畑三人（本耶馬渓レストハウス洞門新館）
常務理事　鹿児島支部長　有村隆雄（長崎鼻長崎鼻記念堂かめや）
常務理事　柴田賀生（洞爺湖エゾップランド柴田屋）
常務理事　松尾建二（砂川砂川ハイウェイオアシス館）
常務理事　鬼川孝助（田沢湖田沢湖共栄パレス）
常務理事　舟山隆（高畠町よねおりかんこうセンター）
常務理事　鈴木智恵子（小田原小田原鈴廣風祭店）
常務理事　牧戸福嗣（伊勢岩戸屋）
常務理事　原庸生（善光寺つち茂物産店）
常務理事　池端秀志（加賀温泉九谷満月）
常務理事　松井道昭（天橋立松井物産）
常務理事　奈良公園菊一文珠四郎包永）
常務理事　紀三井寺はやし）
常務理事　鳥取砂丘砂丘会館）
常務理事　菊西の屋菊ヶ峠ヶ峠店）
常務理事　鵜戸三ツ和鵜戸荘）
常務理事　糸優美蔵）
監事　宇治喜撰茶屋）
監事　金谷ザ・フィッシュ）
常務理事　JTBスーベニア&フォトセンター所長）
常務理事　JTBスーベニア&フォトセンター副所長）
常務理事　松岡泰夫
常務理事　林俊行
常務理事　松永泉
常務理事　西山健司
常務理事　和田晧
常務理事　久保田徹
常務理事　中村健治
常務理事　羽山篤
常務理事　片山実次
常務理事　馬場健